千葉有力企業 キーマンに聞く

基幹道路網の整備や成田国際空港の拡張など、千葉県産業の基幹となるインフラで明るい話題が続いている。また堅調な生産動向を背景に業績堅調な企業が増えている。ただ、ＩｏＴ（モノのインターネット）やＡＩ（人工知能）、ロボットといった新技術の台頭、就労人口の減少に伴う人手不足の深刻化など、モノづくりの変革が迫られている。ユニークな存在感を見せる中堅・中小企業のさらなる活躍が未来の千葉県産業にとっては欠かせない。こうした時代の変化をとらえる有力企業のキーマンに各社の成長戦略を聞いた。

扶桑鋼管

社長 江村伸一 氏

ユーザーのニーズを重視

―建設機械や産業機械の部品などに使われる機械構造用鋼管の加工・販売を手がけています。外部環境をどう見ていますか。

「鋼材価格は値上がりが続き、鋼材卸売りの立場としては、鉄鋼メーカーとユーザーとの間に挟まれて非常に厳しい環境にある。ただ、当社では鉄鋼メーカーとユーザーを効果的にジョイントし、ユーザーニーズに応じた最適な製品を供給するという独自のビジネスモデルを構築してきたことで、現在の業績は順調に推移している」

―7月に創業50周年を迎えました。創業以来構築してきたビジネスモデルの特徴は。

「ユーザーニーズをしっかり把握した上で適切な材質を選定し、それを鉄鋼メーカーに伝え、ニーズに合った製品を造ってもらう。必要に応じて当社で加工も行う。ユーザーの中に入り込み、本当に必要なモノは何か、メーカーはどんなモノを供給すれば優位性が高まるかを認識しながらビジネスをするのが当社の特徴だ。素材をユーザーに売りつなぐだけの既存の鋼材流通ビジネスでは生き残るのが難しい。ユーザーのニーズを何よりも大切にするべきだ」

―海外展開も積極的です。

「タイとインドネシアに拠点を置くほか、5月には中国にも拠点を開設した。国内のユーザーが海外進出を進める時に、しっかりと現地で対応する体制を整えている」

―国内では人手不足が深刻ですが、人材育成では何を重視すべきだと考えますか。

「上から命令するのではなく、社員が自発的にスキルアップに取り組むような社内の雰囲気をつくることが何より重要だと思っている。そうすることで、私自身もびっくりするくらい社員が成長していることがある」

加工を手がける扶桑鋼管の北陸加工センター

企業データ

▽所在地＝千葉県浦安市美浜１の９の２、047・354・8988▽資本金＝１億8000万円▽従業員＝170人▽設立＝1968年（昭43）７月▽ＵＲＬ＝http://www.fusoh-kokan.co.jp/

千葉共同サイロ

社長 祐源通延 氏

きらりと光る会社へ一致団結

―6月に社長に就任されました。

「住友商事では食糧ではなく、化学品畑を歩いてきたが、入社してから農薬の営業が長く、農業という切り口では接点がある。内示があった時も『おもしろいことができるな』と思った」

―どのように祐源カラーを打ち出していきますか。

「最初に従業員にWorking Together、つまり従業員だけではなく、ステークホルダーと一緒に頑張っていこうという話をした。そして、みんなが振り向くような小さくてもきらりと光る会社にしていきたい。一致団結して一歩一歩進んでいく」

―今後、どのようなことに取り組んでいきますか。

「当社にはさまざまな設備があり、例えば穀物貯蔵用サイロは建設してから50年経過し、保守も必要だ。船から小麦を吸い上げるアンローダーも2基ある。設備が大きいので安全操業を徹底する」

「当社は日本最大で最古の食品コンビナートに位置し、輸入した小麦を保管・供給している。小麦の取扱量は年間85万トンで日本最大級だ。食の安心・安全・安定供給が使命だ。その使命をしっかり果たしていくことで社会貢献したい」

―社内の風通しがよいのも特徴です。

「従業員のアイデアを具現化するためにプロジェクトチーム（PT）を立ち上げており、さまざまな案件が推進中だ。組織は縦割りになりがちだが、PT活動により、横だけではなく、年代差を超えたつながりもでき、コミュニケーションも活発になる」

―千葉市が力を入れているナイトタイムエコノミーにも貢献していきます。

「設備のライトアップとサイロにレーザーで映像を映すレーザービルボードを始めた。千葉港のクルーズを手がける企業と連携して実施している。反応もよく、会社のアピールとともに、地域の活性化にも貢献したい。2020年の東京五輪・パラリンピックに向けての活用も千葉市と模索していきたい」

小麦の取扱量は年間85万トンで日本最大級

企業データ

▽所在地＝千葉市美浜区新港16、043・241・1231▽資本金＝４億800万円▽従業員数＝38人▽設立＝1967年（昭42）４月▽ＵＲＬ＝http://www.kyodosilo.co.jp

バインド・ギアコーポレーション

社長 熊谷純一 氏

グループ3社で緊密連携

―6月に熊谷製作所の社長にも就任しました。

「1月には父である熊谷和雄が経営していた熊谷製作所を現金対価による株式交換の手法で完全子会社化している。私が熊谷製作所の社長にも就任することよりバインド・ギアコーポが持ち株会社となり、資本と経営体制が、熊谷製作所とバインド・ギアフィッティングサービスを統治する体制が整った」

―事業承継がスムーズに運びました。

「私はバインド・ギアコーポとバインド・ギアフィッティングを設立したが、家業ではなく、事業として成功するかどうかを考えてきた。それと同様に熊谷製作所も家業として見たことはない。事業として承継したため、しがらみもなくなり、事業承継がうまくいったのだろう」

―熊谷製作所はどのように変わりますか。

「熊谷製作所の営業機能を段階的にバインド・ギアフィッティングに移行する。そして熊谷製作所を高付加価値型のファイルバインダー用金具の生産に特化させていく。熊谷製作所は多品種少量生産を維持しながら、素材を変更するなど商品を高品質化する。また仕様変更にも柔軟に対応できる体制を整える」

―バインド・ギアフィッティングについては。

「バインド・ギアフィッティングは廃業した得意先から事業を承継し、バインダー用金具の商社として国内最大クラスとなっている。この強力な商社機能を生かし、熊谷製作所の商品を拡販する。グループ内の機能重複を解消することなどで、効率的な事業運営体制を構築する」

―今後の展開は。

「グループ3社が緊密に連携できるようにし、国内のバインダー金具市場で強力な部品供給体制を構築していく。グループ3社の売上高は2017年9月期（5月期決算の熊谷製作所は9月期に換算）で4億円だったが、3―5年後に4億5000万円を見込んでいる。将来は売上高経常利益率で10％以上を目指したい」

熊谷製作所は高付加価値型商品の生産に特化（熊谷製作所の工場）

企業データ

▽所在地＝千葉県松戸市中根長津町169▽資本金＝3000万円▽従業員数＝４人▽設立＝99年（平11）５月▽ＵＲＬ＝http://www.bindgear.co.jp/

京葉ベンド

社長 長谷川広志 氏

変化に対応 組織をより強く

―6月に新社長に就任され、長谷川仁志前社長（現会長）から将来を託されました。

「当社が手がけるのはパイプを曲げ加工するパイプベンダー。取り巻く環境はこれまでもさまざまな変化があったが今後もトータルでみて思考するような考え方が求められている。入社して10年となるが、リーマン・ショックや東日本大震災などもあり、皆で知恵を絞って変化し、今の組織がある。今後も俯瞰して大きい視点でみながら組織を強くしていきたい」

―かつてはITや医療関連で従事されていたそうですね。

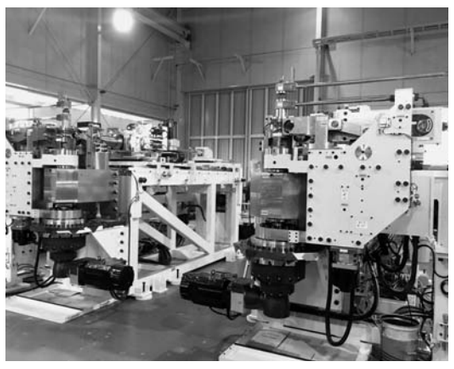
「学生時代に生体工学（バイオメカニクス）の研究室で機械工学や医学、センサー工学などを学んだことが自分の礎。その後、セキュリティー会社や医療関連機関でITプロジェクトを担当してきた。当社の機械は買って頂いてから20年、30年と稼働する装置であり、その間にメンテナンスなども入り変化していく。そうした状況を見える化する、いわば〝機械の電子カルテ〟となる基幹システムの構築を自分の経験を生かし行っていきたい」

―昨年は自動曲げ加工システムを発表するなど新技術への取り組みに意欲的です。

「HEXAGONグループのAICONというメーカーと連携し実現した。当社のCNC曲げ加工機で加工した後、AICONの三次元測定器とソフトウエアで測定後、補正データを算出し、自社開発したソフトウエアで通信し、加工機の制御に生かすという仕組み。自動化のサイクルが可能となる」

―機械同士がITでつながる時代に向け開発の方向性も変わっていきますね。

「ITと組み合わせたハイブリッドなシステムを作ることは今後のカギ。人工知能（AI）の活用も重要だろう。自分のモットーである〝細心而剛胆（にして）〟の精神を大事にしながら、パイプベンダーロボットを生み出す気概で取り組みたい」



大手自動車メーカーなどに出荷されるACサーボ駆動式パイプベンダー

企業データ

▽所在地＝千葉県市川市大洲４の７の12、047・377・1521▽資本金＝1000万円▽従業員数＝38人▽設立＝1950年（昭25）▽ＵＲＬ＝http://www.keiyo-bend.co.jp